

ジョイスの *Dubliners* における “The Sisters” の意義 — “The Sisters” (プロローグ) と “The Dead” (エピローグ) の間 —

樋口紀子

1. はじめに

“The Sisters” は、*Dubliners* の15の作品のうち最初に書かれ、最初に発表された作品である（1904年8月13日の *The Irish Homestead* 誌上）（Ellmann, *Letters of James Joyce* 143-44）。また、この作品は、*Dubliners* の4つの分類「少年期 (childhood)」「青年期 (adolescence)」「成熟期 (maturity)」「社会生活 (public life)」のうち第一の段階の「少年期」の冒頭を飾る作品でもある。この4つの分類は、ジョイス自身がしたものであり（Ellmann, *Selected Letters of James Joyce* 83）、ジョイスの弟 Stanislaus Joyce が “the stories in *Dubliners* were not chosen hazardly; there is an underlying plan in the book” (526) と述べていることから、“The Sisters” が *Dubliners* の最初の作品であるということは、ジョイス自身何か特別な意味をもって冒頭においたものであるということが推測され、ゆえに “The Sisters” は、*Dubliners* のプロローグを飾る重要な作品であると言える。

さらに、“The Sisters”には次の4つの特色により、*Dubliners* の中でも意義深い作品であると言えるのではないであろうか。その第一の特色は、この作品が少年の目を通して身近な存在であった神父の死やその周りの人々の様子を語るという、「直接的な手法」を取っている点で、これは他の作品にはない描き方と言える。第二は、作品の内容がジョイス自身の体験に基づくものであるという事実である（Walzl, *JJQ* 376）（Jackson 11）。第三は、*Dubliners* 全作品のテーマでもある「麻痺 (paralysis)」の姿を、そ

の麻痺の究極な形である神父の「死」を通して描くことによってここでは直接的に扱っているところである。

加えて、第四の特色として、*Dubliners* 最後の作品 “The Dead” を思い起こさせるような共通した記述が随所にあるというところもこの作品の重要性を示すものであると思われる。それはまず、両方の作品共にストーリーの展開がなされるのが主に「夜」であること、次に「窓」のシーンが象徴的に有効的に使われていることである。それは “The Sisters” では、主人公の少年が毎晩明かりのついた「窓」を見上げるという始まりのシーンで使われ、“The Dead” では反対に、主人公ゲイブリエル・コンロイが雪明かりの「窓」を見つめるという終わりのシーンで使われているのである。*Dubliners* の最初の作品の始まりと最後の作品の終わりが共通していることは、この短編集の有機的関連性を示唆するものであると思われる。また、両主人公が、「死者」によって自我に目覚めるというそれぞれの作品のテーマも共通している。

以上のような観点から、この作品はジョイスが *Dubliners* を書いた意図を知る意味で重要な作品であり、*Dubliners* の全作品の「プロローグ」となりうる作品であるとも言えるのではないであろうか。したがって、*Dubliners* の最後の作品、つまり「エピローグ」と言える “The Dead” との関連をもふまえながら “The Sisters” の意義について考察していきたい。

II. 時代とその象徴

この作品の特色の一つは、ジョイスがこの物語の時期を数字ではっきり示していることである。それは、フリン神父の死亡を町中に知らせる「死亡揭示」から窺える。彼は侍者が大事な聖杯 (chalice) を落として壊してしまったことから精神的におかしくなり、聖職から退いて姉妹の世話を受けながら不遇な最後を送った人であった。そして、その死亡揭示は次の通りである。

July 1st, 1895

The Rev. James Flynn (formerly of S. Catherine's Church,

Meath Street), aged sixty-five years.

R.I.P.(D 10)(Joyce 10)

しかし、ジョイスは初稿の時から死亡年月日をこの日に設定していたわけではなく、始めは“July 2nd, 189- The Rev. James Flynn (formerly of Ita’s Church), aged sixty-five years, R.I.P.” (Joyce xxv) であった。つまり、始めは年号をはっきりと記述せず、日付も「7月2日」で最終稿とは一日違いで、また、教会名も異なっていたのである。そして、これが次稿では“July 2nd, 1890”とはっきりと年号を記述するようになり、教会も現在の“S. Catherine’s Church”に変わる。それから、さらに最終稿で年がその5年後の「1895年」となり、日付も1日早い「7月1日」に変更されたのである (Joyce xxv) (Jackson 4)。この事実から、ジョイスがフリン神父の死亡年月日にこだわりをもっていたことが推測される。

そこで、まず死亡年について考察してみたい。John S. Kelly は、このフリン神父が亡くなった年から換算した彼の誕生日 (1829, または1830年) と、彼が生きた65年間の生涯についてカトリック史の面から取り上げている。つまり、1829年というのは“Catholic Emancipation”の年で、ゆえに彼がその誕生から死に至るまでアイルランドのカトリック教会の強い影響下のもとに、自由を奪われながら生きてきたことを示していると主張しているのである (Joyce xxvi)。さらに、John W. Jackson は誕生日と死亡年の両方に着目し、それをアイルランド史の面から考察している。というのは、Jackson はフリン神父の誕生日から考えて、彼がアイルランド史上未曾有の大飢饉で多数の餓死者を出した「じゃがいも大飢饉」(1845-48年) を青年期に経験していることを指摘しているのである (Jackson 4)。この飢饉はフリン神父にとっては、人生の中で大変悲惨な経験であったと思われる。

また、Jackson はフリン神父が亡くなった1895年について、“1895 could be seen as the start of a new technological era: Marconi’s wireless telegraph was beginning, the cinematograph first saw the light, and during that year Rontgen first demonstrated his X-Rays.” (Jackson 4)

と定義づけている。ということはフリン神父は輝かしいテクノロジーの幕明けを経験していない古い時代の人と言うことができるのである。以上のような指摘に加えて、彼がアイルランドの夜明けとも言える文芸復興も国の独立も知らずに亡くなった人であることも考え合わせると、彼はアイルランドの暗黒時代を生きた人ということにもなり、彼自身がアイルランドの古い時代、暗黒時代の象徴であるということができると思われる。

次に、フリン神父の死亡月日に注目すると、まず宗教的には初稿、及び第二稿で選んだ「7月2日」は、カトリック暦では“the Visitation of the Blessed Virgin”で、マリアのエリザベツ訪問を記念する日、またはマリアの奉仕の心を再確認する日に当たる。そして最終稿で設定された「7月1日」は、“the Feast of the Most Precious Blood of Our Lord”, または“the Feast of Christ’s Holy Blood” (Joyce xxv) (Jackson 4) で、イエスが私たちの罪の身代わりとして十字架にかけられ、その十字架上で流された「血」を記念する日なのである。つまり、この「血」はイエスの犠牲的精神を表わすもので、そのイエスの行為に感謝し、それを忘れないようにするためにカトリックのミサではその「血」を象徴するワインを聖杯に入れて飲む習慣がある。そして、その聖杯を持って儀式を行うのが神父であるが、この作品の主人公であるフリン神父は、その聖杯を壊したことが原因で精神を病み、聖職を退いた人であった。したがって、フリン神父の死亡月日を「7月2日」から「7月1日」に変更したのは、彼の死の原因となった事件とより密接に関連させるためと言うことができるのではないであろうか。

では、歴史的に「7月1日」はどのような意味があったかと言えば、この日は、カトリックの国アイルランドにおいて、プロテスタントによる政治面での支配が決定的になるきっかけを作った「ボインの戦い」があった日である (Jackson 4) (Walzl, *JJQ* 405)。つまり、当時イギリスのプロテスタント勢力によって支配されていたアイルランド人たちは、1685年カトリック教徒であったヨーク公がジェームズII世としてイギリス国王に即位することによって、プロテスタントの支配から解放されることを願った。

しかし、ジェームズII世のカトリック解放政策は逆にプロテスタントの反感をかい、1688年彼は王位を追われフランスに亡命することになったのである。そして、その後ジェームズII世はアイルランドのカトリックやフランスの武力をかりて復権を試み、彼の次に即位したプロテスタントのウィリアム三世の軍と戦ったが、残念ながらジェームズII世（カトリック側）が率いる軍は大敗してしまう。これが「ボインの戦い」で、この敗戦により翌1691年、アイルランドにおけるプロテスタントの優位を決定的にした歴史的な文書「リマリック条約」が締結される。これによってアイルランド議会の議員は全てプロテスタントによって構成されることになり、その後アイルランドのカトリック教徒達は、さまざまな分野で差別を受けることになるのである。要するに、「7月1日」はアイルランドが隣接する「東の国」イギリスに支配されることが決定的となった日にちということで、アイルランド人にとっては子々孫々忘れることができない歴史上屈辱的な日にちだったのである。

したがって、ジョイスはフリン神父が死亡した年月日から、彼を宗教的にはアイルランドのカトリック教会に強い影響を受け、その教えに忠実に従いながら生きていたにも拘らず、カトリック教会の規範で締めつけられ、精彩をなくし、結果的には悲惨な状況に追い込まれているアイルランドのカトリック教徒自身を映す鏡として描いていると言える。つまり、これは宗教的にはローマ・カトリック教会の厳しい戒律に縛られ、歴史的にはプロテスタント（イギリス）に抑えつけられて「麻痺（paralysis）」状態に陥り、身動きが取れず、またその状態を打破しようとしなかったアイルランドのカトリック教会、及びアイルランドという国への痛烈な批判なのである。ジョイスはそのことを強調するために「1895年7月1日」を“The Sisters”の主要な出来事がある日として意図的に選んだのではないであろうか。

これに対して“The Dead”は、「1904年1月6日水曜日」(Torchiana 124)を舞台にしている。1月6日は“Twelfth Night,” “the Feast of Epiphany”としてよく知られた日で、クリスマスの最後の日でもある。つまり、この

日はキリストの生誕を祝い、東方からやってきた3人の博士がキリストに出会ったことを祝う日で、ゆえに洗礼と深くかかわっている日とも言える (Schaff 744)。また、この日は「東」から長い道のりをかけてやって来た博士達が星に導かれ、「西」の地で待ち望んだ救い主に出会った日なので、「東」ばかりに目を向けていたゲイブリエルが、「西」(=アイルランド)に影響を受けている人々との出会いにより、「西」の良さに目覚め、「西」によって自分自身を変化させていくという “The Dead” のテーマと合致するものであるとも言える。

つまり、“The Sisters” では宗教的にはローマ・カトリックという「東」に、歴史的にはイギリスという「東」に支配され続けることによって、“paralysis” に陥っている人との出会いを通して、大人としての「目覚め」を経験した主人公の少年を描き、その少年が成人した後、今度は “The Dead” においてアイルランド的なよさが残っている「西」との出会いを経験させることによってアイルランド人としてのアイデンティティを確立していくという人の成長のさまを表わしているのではないであろうか。要するに、これが “The Sisters” と “The Dead” のつながりを示すものであり、ジョイスがそれぞれの作品の年月日においても「始まり(プロローグ)」と「終わり(エピローグ)」の相関関係をはっきりと意識しながら書いているということを証明するものであると思う。

III. 二人の姉妹とその象徴

“The Sisters” と “The Dead” に共通して描かれている登場人物としては、「二人の姉妹」をあげることができる。“The Sisters” では、それは不遇のうちに亡くなったフリン神父の姉妹「イライザ (Eliza)」と「ナニー (Nannie)」で、この作品の題名と深く関係している。また、“The Dead” では主人公ゲイブリエルの母方の叔母で、ピアノを教えながら暮らしている「ケイト (Kate)」と「ジュリア (Julia)」姉妹である。この両姉妹の特徴は、年配でありながら結婚していないという点である。*Dubliners* の中には他にも年配の未婚女性として、“Clay.” に「マライア (Maria)」という人

が登場するが、これらの女性は当時アイルランドでは、女性の結婚が大変難しかったという歴史的事実を反映している。次の文はマライア (Maria) の場合を例に上げ、当時のアイルランドの未婚女性の状況を説明するものである。

Maria's situation and that of thousands of her counterparts in real life in Ireland were affected by the socio-economic conditions and marriage practices of the generations she was born into. For a century after 1845, the year of the great Famine, deprivation drove millions abroad. In Ireland poverty was widespread, jobs few, and salaries low. It often took a young man 15 to 20 years to achieve enough security to marry. As a result, Ireland had the lowest marriage and birth rates in the civilized world. It also had the highest proportion of bachelors and spinsters. Statistics show that marriages for most men were delayed until the period between thirty-five to forty-five, and that they tended to marry women younger than themselves, often women around thirty who had nest eggs themselves. Irish families necessarily had to be concerned about spinster daughters, and if it was possible to have them participate in a family business enterprise, that was often arranged for. In other families, an attempt was made to find a useful niche for them somewhere within the family relationship (Walzl, *Renaissance* 129-130).

つまり、当時のアイルランドに未婚者が多かった理由は、アイルランドの経済的な問題と密接に関係がある。というのは、長い間のイギリス支配がアイルランド経済を失速させ、加えて大量の餓死者を出した1845年の「ジャガイモ飢饉」は、この経済状態に追いつちをかけることになる。それが結果として多数の働き手を移民という形で外国に出すことにつながり、

これがアイルランド経済にさらなる大打撃を与え、アイルランドを世界の中の最貧国の一つにしてしまったのである (Innes 69)。当然ながら働き手が出て行った後の国には老人と女性や子供ばかりが残ってしまう。たとえその中に若い男性がいたとしても、危機的な経済状態にあるアイルランドにおいて結婚して妻や子供を養うことができるような経済的余裕がある男性は、人数的に限られることになる。それで未婚の女性が増えるのである。要するに、このような歴史の犠牲者とも言うべき人たちが “The Sisters” と “The Dead” に登場する両姉妹で、この両者共にそれぞれの作品の記述から当時の未婚女性の質素な生活を垣間見ることができる。特に “The Sisters” のイライザとナニーは、質素というよりもむしろ「みすばらしい」と言った方が適切かもしれない。彼女たちは古くなった時代遅れの洋服を着て、かかとが一方にすりへった布製のブーツをはいているからである。また、彼女達は当時アイルランドでは貧民街であった “Irishtown” (D 16) の出身であることも、傘の修理をしながら細々と生計をたてていたことも、薄暗い店舗兼用の家にしか住むことができなかったことも全てが貧しい生活の様子を表わしている。さらに、彼女たちの無知さを表わす会話から、十分な教育を受ける機会がなかったであろうことも推測する知ることができるのである。それは例えば、当時、主要新聞であった “Freeman’s Journal” のことを “Freeman’s General” (D 15) と間違えたり、最新流行の “pneumatic wheels” を “rheumatic wheels” (D 16) と言ったりする点である。これは質素な生活ながらも、育ちの良いお嬢さん達にピアノを教えることによって生計をたてている “The Dead” のケイトとジュリア姉妹の生活とは格段の差があるものと思われる。

おそらく、このようなイライザとナニー姉妹にとっての自慢は、兄弟が人々の尊敬を集める神父の職についたことであろう。しかも、フリン神父は “Irish College in Rome” (D 11) で学んだ経験があるが、この大学はアイルランドの司祭を養成するためにローマに設立されたもので、優秀で将来有望な青年のみが送られる大学であった (Gifford 31) (Jackson 5)。つまり、フリン神父は彼女たちだけではなく、家族の輝ける星であり、将

来の唯一の希望だったのである。そのような神父に姉妹たちは、自分達の人生を捧げたと言っても過言ではない。イライザの言葉を借りるならば、まさに“God knows we done all we could, as poor as we are--we wouldn't see him want anything while he was in it.” (D 14) であった。これはアイルランドでは珍しいことではなく、長兄の教育に全力をつくすアイルランド的特徴を表したものである。しかし、イライザとナニーにしてみれば、自分を犠牲にしてまでもひたすら仕えた兄弟であったが、その最後の様子は彼女達の期待を大きく裏切るものだったのである、つまり、神父としては挫折し、“paralysis”のためいつも暖炉のそばの安楽椅子に座ったまま動こうとせず、することと言えば主人公の少年と話すことと、その少年が持ってくる“High Toast” (D 10) を嗅ぐことだけであった年をとった兄弟の姿は、自分たちの人生をかけて尽くしてきた姉妹にとっては、大変情けないものであっただろう。そして、フリン神父が亡くなった今、姉妹に残されているのは、残りの人生をつつがなく静かに暮らすことだけであった。これは“The Dead” ケイトとジュリア姉妹にしても同じことであったが、イライザとナニー姉妹の悲劇は、犠牲的精神をもってフリン神父に仕えたにも拘わらず、その結果が輝かしいものではなく、誰からも尊ばれない「惨めな死」という形で返ってきたことである。これはアイルランドのカトリック教会やアイルランドという国のためにただひたすら仕えた伝統的な女性達、つまり修道女(シスター)の行動を象徴するものであり (Tindall 15), その結果も“paralysis”に陥り、死人のようになってしまったアイルランドのカトリック教会、及びアイルランドの国を意味している。彼女たちの努力が徒労に終わったことを暗に示すものなのである。これが“The Sisters”を通してジョイスが現わそうとしたアイルランドの最大の悲哀であると言える。

IV. “the living” と “the dead” の間

Dubliners の作品の特徴は、作品の中に「死者」が登場したり、また、実際に死者が登場しなくても、何か「死」に関する記述が多いことである。

そして、それが特別なことではなく日常生活の中に何気なく現れる。それはまるで生と死が共に日常を共有しているかのようである。例えば、“The Dead” では題名からして直接的に死を表しているし、作品中にも死を連想させるものが至るところにちりばめられている。それはアイルランド中に降り注いでいる冷たく、はかない雪や冬という寒い季節でもあるし、モルカン姉妹の死人のような表情、亡くなった人のことばかりを話題にする会話等もそうである。さらに、クライマックスでは、主人公の妻グレタの昔の恋人マイケル・フエアリーという死人までが重要人物として登場してくる。

では、“The Sisters”の死に関する記述はというと、冒頭から“*There was no hope for him this time: it was the third stroke.*” (D 7) という少年のフリン神父の死に関する説明で始まるのである。少年は臨終にあった神父の死を確認するために、神父の家の下を通るたびに毎晩窓を見上げていた。窓からさす明かりの違いで生死がわかったからである。明かりは毎晩“*faintly and evenly*” (D 7) に光っていたが、これはまるで神父のはかない命の灯火を象徴しているかのようであった。神父は晩年、死を連想させるような薄暗い家に姉妹と共にひっそりと住み、“*I am not long for this world*” (D 7) と少年にしばしば語り、自分の死が遠くないことを予期していた。また、物語の内容もフリン神父の死を中心に扱ったものであるので、作品の中には当然ながら死を象徴する記述にあふれている。

このようなジョイスの作品の中に描かれている「生と死」の記述についてオコナーは、“*an Irishism that ingeniously suggests both life and death*” (O'Connor 24-25) と述べているが、これはケルト民族が信仰していた「ドルイド教 (Druidism)」と関係がある。このドルイド教では、「靈魂の不滅 (immortality of the soul)」や死んだ後でも「この世 (this world)」と同じように生き続けることができる「あの世 (otherworld)」が存在することを信じていたのである (Ellis 193)。そして、そのあの世は西の海の果てにあるもので、この世と同じ平面上にあるもの、延長線上にあるものと認識していた。ゆえに、“otherworld” は “this world” と断絶されたもの

ではなく、“otherworld”に行った人間であっても、必要があればいつでも“this world”に帰ってくることができ、しかも、その際“this world”の人間と自由に交流することもできると考えていたのである。これがケルトの循環思想であり、人々はその循環の中で永遠にめぐりめぐっているのである。それは春夏秋冬の季節が永遠にめぐるように、人生の冬（死）を迎えた者であっても、“otherworld”から“this world”に戻り、生者と共に再び春を感じるができるという循環でもある。また、この循環思想は、ケルト美術にも影響を与え、「円」や「円環」を基本とした形で循環や永遠を表わすようになったため、そのようなモチーフがケルト芸術では多数使われている。これらの考え方が生と死の混ざり合いや“the dead”と“the living”の近さを表わすものであると言える。そして、これらはドルイド教を信仰していたケルト民族の中心的考えであり、ケルトの末裔であるアイルランド人の考えでもある。彼らの多くはカトリック教徒でありながら、このような考え方を現在でも連綿と受け継いでいるのである。例えば、“The Dead”の中で、アイルランドのある修道士たちは死を忘れないために毎晩棺の中で寝る習慣があるという話題が人々の会話の中に取り上げられている。これは死を意識しながら生を生きているアイルランド人の姿を表わす一つの例であるが、これが“the dead”と“the living”が近くに存在し、お互い影響しあいながら同じ時を過ごしているケルト、つまりアイルランド人の世界を如実に表わしているものであると言えるのではないであろうか。それが *Dubliners* 中の登場人物の日常にも直接的に表われるという特色を持っているのである。

また、アイルランドの海の向こうの「西の果て」にあると信じられている“otherworld”の位置の特色から、「西」そのものが“Otherworld”や死の象徴でもある。例えば、“The Dead”では、グレタの出身地である西の町ゴールウェイは、彼らが住むダブリンよりも“otherworld”に近い場所であり、従って“the dead”と“the living”がより親密な関係を持ちながらアイルランド的要素を保ち続けている場所とも言えるのである。このアイルランド的要素が、アイルランド人でありながら「東」にあるイギリス

やヨーロッパにばかり目を向けていたゲイブリエルに変化を起こさせるきっかけになる。それは妻グレタであり、グレタの心の中に生き続けている今は亡き恋人マイケルの存在であった。グレタを心から愛し、グレタからも愛され、グレタのことならば何でも知っていると思いがっていたゲイブリエルは、グレタの中にも自分が知らない世界があることを知り、初めて人の存在の複雑さとその深さに接するのである。それは“the living”の中に“the dead”が息づいている深さであり、“this world”の中に“otherworld”が存在している深さでもあった。“the living”や“this world”という目に見えるものだけを見つめて生きてきた現実主義者のゲイブリエルは、自分も深みのある人間になろうと決心し、自分の心を“otherworld”の人間“the dead”にも解放してみようと試みるのである。ここにゲイブリエルのアイルランド人としての霊的成長が見られる。

一方“The Sisters”では、主人公の少年は死と共に生きているフリン神父やその姉妹達と交流があったにも拘わらず、アイルランド的“otherworld”とは無関係に生きていた。というのは、少年はその若さゆえに死を決意していた神父の言葉を“I had thought his words idle.”(D 7)と充分に理解することができなかつたからである。これは若さゆえの無知というよりも、その少年が死とは無縁の生を謳歌している「生」そのものの象徴だったからである。それは少年が神父が生きている間は神父のもとに足しげく通ったにも拘らず、死亡した神父の家の中には入ることをためらい、明るい“the sunny side of the street”(D 11)を歩いて行ったという記述からも伺える。しかも神父の死の知らせを聞いて、彼は悲しむよりもむしろ解放感を味わい、心がかろやかになるという彼の心の様子からも理解できるのである。それはまた細かな規則で神父をがんじがらめにし、その重圧により“paralysis”に陥らせる原因となったアイルランドのカトリック教会からのしばし解き放たれた心地よさをも意味していると思われる。

しかし、その解放の心地よさを感じるのもつかの間、少年は夢の中で再びフリン神父に出会ってしまうのである。これが生を謳歌していた“the living”に対する“the dead”の干渉の始まりである。夢に表われたフリン

神父は少年に何かを訴えるようにぶつぶつとつぶやき始め、少年はそれがフリン神父の告解ではないかと思いながら眠ってしまう。

In the dark of my room I imagined that I saw again the heavy grey face of the paralytic. I drew the blankets over my head and tried to think of Christmas. But the grey face still followed me. It murmured; and I understood that it desired to confess something. I felt my soul receding into some pleasant and vicious region; and there again I found it waiting for me. It began to confess to me in a murmuring voice and I wondered why it smiled continually and why the lips were so moist with spittle. But then I remembered that it had died of paralysis and I felt that I too was smiling feebly as if to absolve the simoniac of his sin. (D 9)

フリン神父は少年にとって少年の身近にいる人々の中で唯一高等教育を受けた人であり、ある意味で大人の世界や未知の世界を垣間見せてくれる貴重な窓でもあった。少年は彼からカトリックの教義、ラテン語、人生の意義、罪について等、当時のアイルランド人として大切なことを教わったのである。また、神父は将来彼が進むべき道の先にいる目標であったかもしれない。しかし、そのような神父であっても「告解」をすべき罪を持っているただの人間であったということが夢によって明らかにされたのである。そして、自分よりも遥かに大人で物知りであった神父が、告解の対象として年端も行かない自分を選んだということが、自分をやっと一人前の大人として、また心を許す存在として認めてくれたことを意味すると思っただのである。それで、実際に神父の死の姿を見に行った時少年は、神父が彼に対して笑いかけてくれるものと期待していた。しかし、彼は夢の中に出てきた、少年にはほほえみながら罪の告白をした神父ではなく、彼は死んだ今もカトリックの神父然とした固い表情で横たわっていたのである。

“There he lay, solemn and copious, vested as for the altar his large

hands loosely retaining a chalice. His face was very truculent, grey and massive with black cavernous nostrils and circled by a scanty white fur.” (D 13) そのようなフリン神父の姿を見て、少年は大人の世界の二面性を知ってしまう。これが少年にとって本当の意味での大人の世界への一歩足を踏み入れる瞬間であった。彼の肉体的、及び精神的成長の始まりである。このように “The Dead”, “The Sisters” 共に ‘the dead’ に影響を受けることによって ‘the living’ が変容し、人間的に成長していくという共通点がある。それは “The Sisters” に始まり、最後の “The Dead” においても受け継がれている特徴なのである。

V. おわりに

“The Sisters” の登場人物は、「孤児である少年」「子供のいない叔父・叔母」「寄るべのない Cotter じいさん」「侍者が聖杯を壊したことにより精神を病んでしまい、不遇のうちに亡くなったフリン神父」「その神父にひたすら仕えた年老いた姉妹」と全て “孤独” の中に生きている人々であった。彼らの住む世界はダブリンで、主人公の少年以外は恐らく将来ダブリンを出る可能性もなく、このままの状態ですべてを迎えることになるであろうことを容易に予感させる。これは “black pool” (Room 157) を語源とするダブリンの澱んだ状態を象徴するものである。話題の中心であるフリン神父も、貧民街であった “Irishtown” の出身ながら、その秀でた賢さによってエリート神父の道を歩むことになり、一度は家族の希望の星となった。そして、その兄弟の出世のために姉妹達は犠牲となって尽くしたのである。その彼女達の自己犠牲の精神は、当時のアイルランドでは選択の余地のない女性の選ぶべき唯一の道であった。しかし、その神父も侍者が聖杯を壊したことにより自責の念にかられ、精神を病んでしまい “paralysis” に陥ってしまう。つまり、彼は宗教的には数々の教義で人をがんじがらめにしてしまうアイルランドのカトリック教界の閉鎖性を象徴し、政治的には長い間イギリスに支配されたことによって支配者に迎合することを徹底的に教え込まれたアイルランドの人々の代表になってしまうのである。また、神

父達は生まれ故郷“*Irishtown*”を訪問したいと思っていたが、同じダブリンにありながらも、今住んでいる自分の場所から出て行くことさえもかなわず、生まれ故郷を見ることなく一生を終えてしまう。この“*Irishtown*”は、当時は貧民街であったが、古代栄えた町でもあった(Walzl, *JJQ* 404)。したがって、神父と姉妹はかつての古き良きアイルランドを取り戻りたいと希望しながらも“*paralysis*”のために行動を起こせないでいるアイルランドという国そのものをも表しているのである。

さらに、ジョイスは“*The Sisters*”において、フリン神父が死後、少年の夢の中に表われ、罪を告白する場面を描くことによって、人は神父という聖職につきながらも罪から完全に解放されているわけではなく、他の人々と同じように告解すべき恥部を持った弱い人間ではないかという疑問を少年の目を通して私たちに投げかけているのである。これは流れを止められたようなダブリンの澱み(“*paralysis*”)の中では、輝かしい将来があるような少年でさえも、そこからは抜けられず、究極的には神父のように“*paralysis*”に陥るような生き方しか残されていないということを暗に示しているものであるとも言える。このようなアイルランドの現実、生を謳歌している少年にしてみれば、生きる意欲をなくさせるようなものであったかもしれない。

このように“*The Sisters*”では、ジョイスは「生」(life, 東, 少年, sunny side)から「死」(death, 西, フリン神父, 闇), に光をあて、徹底的にアイルランドの暗い麻痺の部分に照らし出している。しかし、ジョイスは *Dubliners* の最後の作品“*The Dead*”では、そのようなアイルランドでもアイルランドの素晴らしさがあり、それに目を向けることによりアイルランド人としていきいきと生きていくことができる可能性を示唆していると言える。つまり、彼は“*The Dead*”では、“*The Sisters*”とは反対に「死 (death)」または「死人 (the dead, マイケル・フェアリー)」が「生 (life)」または「生者 (the living, ゲイブリエル)」にアイルランド的「命の光」をあて、“*otherworld*”を意識しながら生きるアイルランド的生き方の素晴らしさを示したのである。それはゲイブリエルが“*epiphany*”の雪

の日の夜、自分の意識を西の方に向けた時に経験できたことであった。ここには少年の頃、何事にも二面性があり、また偽善に満ち満ちていると感じてアイルランドに背を向け、そこから外の世界へ飛び出して行ったジョイス自身のアイルランドへの帰還が描かれていると言える。これは肉体的にも精神的にも成長したジョイスが、外の世界からアイルランドを客観的に見つめ直した時に初めて理解できたアイルランド人の霊的深さに対する共感である。ゆえに、“The Sisters” は人の「肉体的、精神的成長」をテーマとし、“The Dead” は人のさらなる成長である「霊的成長」をテーマにしたものと言えるのではないであろうか。このような壮大な人間のドラマの設定が、*Dubliners* が人々を魅了してやまないところではないかと思うのである。

《参考文献》

- Ellis, Peter Berresford. *A Dictionary of Irish Mythology*. Oxford University Press, 1992.
- Ellmann, Richard, ed. *Letters of James Joyce*. vol.II, New York: The Viking Press, 1966.
- . *Selected Letters of James Joyce*, The Viking Press, New York, 1975.
- Gifford, Don. *Joyce Annotated*. University of California Press. 1982.
- Innes, C.L. *Woman and Nation in Irish Literature and Society, 1880-1935*. Hemel Hemstead: Harvest Wheatsheaf, 1993.
- Jackson, John Wyse, *James Joyce' Dubliners: An Annotated Edition*, Sinclair-Stevenson: London, 1993.
- Joyce, James. *Dubliners*. London: Everyman's Library, 1991.
- Joyce, Stanislaus, “The background to 'Dubliners.'” *Listener*, LI March 25, 1954.
- O'Connor, Frank. “Work in Progress.” *Twentieth Century Interpretations of Dubliners; A Collection of Critical Essays*. Peter Garrett. Prentice-Hall, Inc., 1968.
- Room, Adrian. *Dictionary of Proper Names*. Cassell: London. 1994.
- Schaff, Philip ed. *A Religious Encyclopedia: Dictionary of Biblical, Historical, Doctrinal, and Practical Theology*. vol.1, The Christian Literature Company, 1882.

Tindall, William York, *A Reader's Guide to James Joyce*, The Noonday Press:
New York, 1959.

Torchiana, Donald, T. "The Ending of 'The Dead: ' I follow St. Patrick." *JJQ*.
Vol.18, No.2, 1981.

Walzl, Florence L., Joyce's "The Sisters": A Development, *JJQ*, Vol.10, No.4,
1973.

---. "Joyce's 'Clay: ' Fact and Fiction," *Renascence*, 35, Winter, 1983.